

## 『狭衣物語』 作中歌と中世和歌

後藤, 康文  
九州大学大学院博士課程

<https://doi.org/10.15017/10460>

---

出版情報 : 文献探究. 16, pp.11-30, 1985-09-25. 文献探究の会  
バージョン :  
権利関係 :

# 『狭衣物語』作中歌と中世和歌

後藤康文

はじめに

『狭衣物語』が、中世から近世にかけて『源氏物語』とならぶほどの高い声価を勝ちえつたのは、藤原定家によって、「於歌者抜群」(『明月記』貞永二年三月二十日)と端的に評されたことから知られるように、その巧緻で斬新な作中歌の多さに、ひいてはこの物語特有の和歌的情趣溢れる筆致に負うところが大きかったと考えられる。そうであつてみれば、『狭衣物語』を享受した後代とりわけ新古今時代の歌人たちが、『伊勢物語』や『源氏物語』の場合と同様に、これを作歌の拠り所として重んじたことは、むしろ当然だつたと思われ、その実態を明らかにしてゆくことは、『狭衣物語』研究にとつてもひとつの課題とならう。

この方面における従来の業績としては、『源氏物語』受容史研究に付随する形で寺本直彦氏に一連の御論及があるほか、中世和歌研究及び『狭衣物語』研究双方の立場からかなりの指摘が見られるけれども、未だ補いつる点も多く、また一括して扱われたこともなかったようである。以上のような事情に鑑み、本稿では、『狭衣物語』の影響が中世和歌の上にとどのように具現しているかについて、(1)主として物語の側から、(2)さしあたり対象を作中歌に限定し、(3)その表現のレヴェルに照準を定めて、ある程度まとまった調査を試みたいと思つ、なお本稿で扱う、中世和歌の範囲は、新古今時代を中心と概ね鎌倉期を下らない時点までとする。

はじめに、『狭衣物語』が特定の先行和歌・先蹤表現を自作歌中に取りこんだ上で、後世への影響をもたらしたと考えられるケースについて、具体的な検討を試みよう。

\*

いかにせんいはぬ色なる花なれば心のうちをしる人ぞなき<sup>4</sup>

(巻一・106頁ノ風・百)<sup>5</sup>

右は、義妹源氏宮への「いは思ふ恋」の懊悩を眼前の山吹の花に託して表出した狭衣の心中詠であり、いうまでもなく、二百首余に及ぶ『狭衣物語』作中歌の劈頭に位置する一首である。ところでこの歌は、どうやら次に掲げる円融院の御製を踏まえて作られたらしい<sup>6</sup>。

九重にあらで八重咲く山吹のいはぬ色をはしる人もなし<sup>7</sup>

(『円融院御集』・『実方集』・『新古今集』)

ここでまず注目したいのは、両歌に共通する「いはぬ色」という歌語である。というのも、『狭衣物語』以前の現存和歌において山吹等の「くちなし色」をこのように「いはぬ色」と詠んだ例は、右の円融院御製を除くと、あとは異本『中務集』のうちにわずか一首を認めうるにすぎず、かなり珍しい表現であつたと思われらるからである。そして、『狭衣物語』より後にも長らくその所見はなく、

今日まで首見に及んだ限りでは、仁安二年(1162)八月太皇太后宮亮  
経盛歌合における藤原定長(後の寂蓮)の次の歌が、再び「いはぬ  
色」を詠みこんだ最も早い例として挙げられる。

声たつて鳴く虫よりも女郎花 いはぬ色 こそ身にはしみけれ

この寂蓮の歌は、「萩が花わけゆくほどはふるさとへかへらぬ人  
も錦ぞやみる」という源有房の作に敗れているが、興味深いのは、  
この時の清輔の判詞である。

左、よく詠まれて侍り。右、いはぬ色とはいかなる色にか。く  
ちなし色と思ひなされたるにや。心えがたくや。いかにも左勝  
に侍るめり。

これに拠ると、当時歌壇の重鎮であった硯学清輔の目には、「く  
ちなし色」と同義の「いはぬ色」という言葉が、いかにも「心えが  
た」いものに映ったことが知られ、そのように言い馴わされていな  
い表現を用いた寂蓮の歌を、伝統を重んずる彼の立場から負けとし  
たものと思われる。歌の主が、当日御子左家からただひとり出席し  
ていた新進で、清輔とは対立関係にあった俊成(顕広)の猶子寂蓮  
であったこと、また、清輔が「偏頗ある判者」(『無名抄』)であ  
ったと伝えられていることなどを考え合わせると、右の判詞にも感  
情的なものに由来する不公正さがあるやにかんぐりたくもなるが、  
どうもそれはないうらしい。なぜなら、この歌合の判は作者名を隠し  
て行われたようなので、判者がどこに特定の私情をさしはさめたと  
は思われないうし、よしんば作者名がわかっていったとしても、博覧強  
記を以って知られた清輔が、「いはぬ色」という表現の先蹤を知っ  
ていながら、「心えがたくや」とやらとはけたとも考えにくいから  
だ。かといって、彼が少なくとも『狭衣物語』を全く読んでいなか  
ったとは思われないので、おそらくたまたま失念していたというの  
が実情だったのだろう。ともあれ、この清輔の判詞の内容からして、

円融院御製『狭衣物語』と受け継がれてきた「いはぬ色」という  
歌語は、この時期に至って、もなお一般的なものではなかったと見るこ  
とが可能になろう。

ところが、所謂新古今時代以降になると、この表現は多くの歌の  
中に見出されようようになる。左には、その代表的なものを教首列  
挙する。

たづねつてしまが崎の山吹のいはぬ色しもしるべがほなる 有家

(「千五百番歌合」)

ちらすなよ井手のしがらみせきかへしいはぬ色なる山吹の花 定家

(「奉和無動寺法印早妻露膽百首」・『拾遺草』)

いはぬ色の心をくみてあはれとも君やみつの山吹の花 家長

(『夫木抄』)

忍べともいはぬ色なる山吹の花に恋しき井手のふるやと 通成

(「千五百番歌合」・『夫木抄』)

ことにいでていはぬ色とや水無瀬川かはらじ春の山吹の花 順徳院

(「建保名所百首」・『順徳院御集』・『夫木抄』)

円融院御製は『新古今集』にも撰入されており、これら中世和歌  
に用いられた「いはぬ色」という歌語が、『狭衣物語』作中歌と比  
較した場合に直接的にはいずれに拠って出たものか、一概に決めつ  
けることはできないだろう。しかしながら、次のような歌の存する  
ことを鑑みると、どうしてもそこに『狭衣物語』の影響を想定せず  
におくことは許されないように思われてくる。

(A) すぎがてに井手のわたりを見わたせばいはぬ色なる花の夕はへ  
後鳥羽院

(「正治初度百首」・『後鳥羽院御集』)

後嵯峨院

(B) 咲きぬともいはぬ色なる山吹の籬のうちをしる人もなき

(「宝治百首」・『明題集』)

後嵯峨院

(C) 暮れぬともをちかた人にことはんいはぬ色なる花は何ぞも

(「白川殿七百首」・『明題集』)

これらのうち(C)については、「いはぬ色なる花」という形がより『狭衣物語』歌との合致度が高いといえる程度であるが、(A)の後鳥羽院御集は、件の歌を含む『狭衣物語』冒頭部分を明らかに意識したものと判断されるのである。今、(A)歌と『狭衣物語』冒頭部との間に見られる語句上の対応関係を示すと、左のとおりである。

▼少年の春は惜しめどもとまらぬものなりければ、弥生の二十日あまりにもなりぬ。池のみぎはの八重山吹は、井手のわたりにことならず見わたさるる夕はへのをかしさを、ひとり見給ふもあかねば。源氏宮の御方にもつ参り給へれば、宮は御手習ひ、絵などかきすさびて添ひふさせ給へるに、「この花の夕はへこそ、つねよりもをかしく侍れ。……」とつ、うち置き給ふを、……

(巻一・節頁)

▼すぎがてに井手のわたりを見わたせばいはぬ色なる花の夕はへ  
さらに、(B)の後嵯峨院御集の下句「籬のうちをしる人もなき」は、『狭衣物語』歌の「心のうちをしる人もなき」を摹写したもので、この一首が『狭衣物語』歌を踏まえて詠まれたこともまた明白だとはいへばなるまい。

北村季吟は先の円融院の歌に注して、「山吹はくらなし色なればいはぬ色」と詠み習はせり」というが、これまでの考察からして、うした定着を見るのは中世以降のことなのであり、しかも、「いはぬ色」という和歌表現がさよう盛行した源には、『狭衣物語』冒頭歌の存在があつたものと思われる。

さて、同歌についてはもつひとつ別の観点から、中世和歌への影響を見取ることができようである。それは、この歌の持つ初句「かにせん」結句「しる人もなき」という独自のスタイルで、平安時代末期以後になると、これを踏襲した歌が現われてくるのである。

かにせん玉江の葦のしたねのみよをへてなけどしる人のなき  
頭輔

(『続後撰集』)

かにせん御垣原につむ芹のねにのみなけどしる人のなき  
経盛

(「治承三十六人歌合」・『千載集』)

かにせん袖のしがらみかけやむる心のうちをしる人もなき  
定家

(「初学百首」・『拾遺草』)

かにせん朽木の桜老いぬとも心の花はしる人もなし  
実氏

(「宝治百首」・『統千載集』)

かにせんよよには見えぬものなれば心の色をしる人もなし  
時朝

(『時朝集』)

かにせん袖のみぬれて石見瀧いはぬくらみはしる人もなし  
為綱

(『統拾遺集』)

右に掲げた六首のうち、顕輔及び経盛の歌は初句・結句のみ一致するにとどまるが、定家以下の四首は、どれもそれ以上に多くの言葉で『狭衣物語』冒頭歌から取りこんでおり、これらがみな同歌に依拠した詠作であることは歴然としてゐる。

\*

楫緒たえ命もたゆとしらせばや涙の海にしづむ舟人

(卷一・270頁/風・百)

流紫へ連れ去られようとす船中で、道成の置き去った狭衣の扇に残る手蹟(「わたる舟人楫緒たえ」)を見て、涙におぼはれながら飛鳥井女君が詠んだこの歌は、さながら次に掲げる曾祿好忠の二首を缝合したような趣きを持つ。

由良の門をわたる舟人楫緒たえ行方もしらぬ恋の道かな

人恋ふる涙の海にしづみつつ水のあはとぞ思ひ消えぬる

今あらためて好忠歌との語句上の対応を明示すると、楫緒たえ命もたゆとしらせばや涙の海にしづむ舟人

となる。この歌のポイントは、このように好忠の恋歌二首を巧みにミックスして自作の世界を重層的に構築したところにあるわけだが、ここで特に「楫緒たえ」と「涙の海」というふたつの表現を核と見て注目するならば、これらが一首のうちに並存する先蹤は見あたらない。ところが、新古今時代においては、左のような例が認められるのである。

(A) 今ほとと涙の海に楫緒たえ沖にわづらふけこの舟人

(「治承題百首」・『秋篠月清集』・『夫木抄』)

良経

道家

(B) 楫緒たえ涙の海にしづいでぬと木綿つけ鳥の音にもつたへよ

(『夫木抄』)

(A)の良経の作も、その表現の合致度から『狭衣物語』歌を踏まえ、詠まれたものと見なしてよいであろうが、それがソクヤウはッキリするのは(B)の道家の歌である。というのも、この一首は先の「楫緒たえ」歌のほか、左に挙げる二首の『狭衣物語』作中歌をも合わせ含んだ構成になつてゐると考えられるからだ。

天の戸をやすらひにこそいでしかと木綿つけ鳥よとはは客へよ

(卷一・274頁/風・百)

早き瀬の底のもくづとなりにきと扇の風よ吹きもつたへよ

(卷一・278頁/風・百)

ちなみに、(B)歌と『狭衣物語』の三首との語句の上での対応関係をひとまとめにして示すと、次のごとくである。

楫緒たえ涙の海にしづいでぬと木綿つけ鳥の音にもつたへよ

ここで興味深いのは、道家の基いた三首の作中歌が互いに何の関連をも有していないのではなく、いずれもが、やがて虫明の瀬戸の底の藻屑と消えはてようとす飛鳥井女君の、悲痛な心情を吐露した絶唱だという点である。『狭衣物語』全作中最も後代の読者を惹きつけた部分は、ほかならぬこの飛鳥井女君譚であった。道家はおそらく、卷一終末部におけるこの悲運の女君の痛哭を、その詠歌を素材として一首のうちに再主しようとしたのであろう。

なお、右に触れた「天の戸を」の歌は、とりわけ印象深い一首だったのか、道家詠以外にもかなりの被影響歌が残つてゐる。ここでついでにその主なものを紹介しておきたい。

やすらひにせわくる朝の袖の露木綿つけ鳥のとはは客たらん

良経

(「治承題百首」・『秋篠月清集』)

俊成卿女

やすらひにいでにしままの天の戸をおしあけがたの月に任せて

(「為家百首」・『俊成卿女集』)

右二首のうち、前者は『古今集』恋三(『伊勢物語』25段)の「秋の野に世わけし朝の袖よりもあはでこし夜ぞひちまさりける」(業平)、後者は『新古今集』恋四の「天の戸をおしあけがたの月見ればうき人しもぞ恋しかりける」(よみ人しらす)といったともに著名な歌とあわせて、『狭衣物語』「天の戸を」歌を本歌としていることがわかる。このほか、次の諸詠にも同歌の影響が認められよう。

定家

やすらひにいでにしままの月の影わが涙のみ袖に待てども

(「六百番歌合」・『拾遺萬草』)

定家

やすらひにいでけんかたもしら鳥のとば山松のねにのみやなく

(「道家百首」・『拾遺萬草』・『統古今集』)

良経

やすらひにいでにし人のかよひ路を深き野原とけふは見わか

(「六百番歌合」・『秋篠月清集』・『新後撰集』)

良経

やすらひにたのめついでし跡しあればなほ待つものを庭の蓬主

(「院句題五十首」・『秋篠月清集』・『新統古今集』)

\*

たづぬべき草の原へ霜がれてたれにとほまし道之の露

(卷二・27頁ノ風・百)

これは、素姓も知らぬままに行方不明となつてしまつた飛鳥井女

君を追慕する狭衣の独詠で、卷二巻頭の歌であるが、この歌は既に指摘があるように、『源氏物語』花宴巻の朧月夜尚侍の詠、

うき身世にやがつ消えなばたづぬも草の原をばとほじとぞおもふ

に拠つてゐる。そして、後世の和歌に与えた影響という点で、たとへば定家の、

世にしらぬ朧月夜はかすみつつ草の原をばたれかたづねん

(『拾遺萬草頁外』・『夫木抄』)

などのごとく、むしろ『源氏物語』の歌を重視しなければならぬ場合も無論あるが、これとは別に、直に『狭衣物語』の歌を踏んだ形跡の明らかに窺える詠作もまた存在するのである。

慈円

霜がれのしづがあらたの草の原春なつかしき色を待つかな

(「拾玉集」)

定家

夢路まづ人めはかれぬ草の原わきあかす霜にむすばはれつつ

(「正治元年左大臣家冬十首歌合」・『拾遺萬草』)

俊成卿女

霜がればよくとも見えぬ草の原たれにとほまし秋のなごりを

(「新古今集」)

成茂

草の原たれにとほまし人めだにみな霜がれの秋のなごりを

(「成茂宿禰集」)

後鳥羽院

草の原露のやどりを吹くからに嵐にかほろ道之の露

(「後鳥羽院御集」)

家良

草の原露のふり葉もかれはつたづぬる道もえやは見えけん  
（『家良集』・『新撰六帖』）

為家

草の原秋の末葉の露霜にうらかれわたる虫の声かな

（『為家集』）

雅有

たづぬべき行方もしらす草の原霜に跡なく秋はいぬめり

（『隣女集』）

伏見院

草の原露のよすがになく虫のうらみやなぐとたれにとほまし

（『明題集』・『続後拾遺集』）

問題を作中歌の表現面に限定して乱暴に言つてしまつと、『源氏物語』の歌にはない「霜がれ（て）」、「たれに（とほまし）」、「道芝の露」などといった狭衣詠独自の要素がある程度確定に見えていけば、こちらをうの詠作の本歌ないしは影響歌（のひとつ）と認めてよいと思われろ。右のうち、『新古今集』所収の俊成卿女の作を例にとると、この歌に「霜がれ」、「たれにとほまし」の両要素が含まれてゐる以上、「花宴巻に（歌略）」、「この歌によりて草の原へとひ行きし様なる歌なり。狭衣に（歌略）」、「これは源氏物語よりいであら枝流なり。源によらは忘れりもありなん」（『尾張逸家芭』）といった見解には従えない。

また、右に列挙した諸例は、すべて『源氏物語』の歌と共通する中心語「草の原」を含むものであったが、一方でこれをはずすかもしくは解体した受容の形態も見られる。左にはその一例として、良経の歌を二首ほど掲げておこう。

若草のつまもわらはに霜がれてたれにしのはん武蔵野の原

（『西洞隠士百首』・『秋篠月清集』）

たづぬべき萩の葉風も霜がれてたれにとほまし秋のわかれ路

（『千五百番歌合』・『秋篠月清集』・『夫木抄』）

寺本直彦氏御指摘のことく、『愚問賢注』に「本説、本文、詩の心、物語の心、そのみ不可詠之由申して侍れども、つねに見え侍るにや、よもぎふの本の心、狭衣の草の原、目なれ侍るか」とあり、『狭衣物語』全体の中でもこの「たづぬべき」の歌（及び巻二冒頭部分）は、特に後世の和歌作品に甚大な影響を残したようである。

\*

(A) 折れかへり起きふしやぶる下萩の末越す風を人のとへかし

（巻三・69頁ノ風・百）

(B) つき身には秋もしらるる萩原や末越す風の音ならねども

（巻三・71頁ノ風・百）

(A) は、一品宮との不本意な婚儀が定まったのも御身のつらさゆえと、女二宮に怨みかかる狭衣の贈歌。(B) は、これを見た彼女がうのかたわらにやり場のない胸のうらを責つけた歌で、結果的に(A)の答歌の形をなしている。ここで問題にしたいのは、両歌に共通する「末越す風」という歌語であつて、『狭衣物語』以前には、次の歌において見出だされるのみである。

萩の葉の末越す風の音よりが秋のふけゆくほどほしらるる

（『天禄三年八月規子内親王前栽歌合』・『源順集』）

『狭衣物語』歌の「末越す風」という表現は、右の歌に拠つたものと考えよく、ことに(B)歌は、明らかにこれを本歌として作られたと判断される。ところで、この「末越す風」もまた、後の和歌の上にはしばしば用いられるようになるのである。たとえば、

玉柏末越す風にはかられてまだきに鹿や声たつらん

俊賴

（『散木奇歌集』・『夫木抄』）

親盛

萩しげらやたのひろ野をわけゆけは末越す風ぞ秋にかはらぬ

（『清水寺歌合』・『夫木抄』）

頼資

衣手もすすしくなりぬ深山木の末越す風の夏の夕かけ

（『万代集』）

秀能

庭の萩のなかばは霜やむすぶらん末越す風によはる松虫

（『如願法師集』）

などがこの例として挙げられる。そして、これらを見る限りでは、よく『狭衣物語』歌の影響を認めねばならない徴証は持たない。それはかりか、次の通成の歌などは上句が『源順集』歌と完全に一致しており、『狭衣物語』より後の「末越す風」についても、直接やららに依頼したと考えねばならないものがある。ことを否定はできない。

萩の葉の末越す風の音よりかほのかに秋をキキはじめける

（『室治歌合』・『明題集』）

しかしながら、左に掲げる諸歌についてはどうであらうか。

定家

いくかへりなれつもかなし萩原や末越す風の秋の夕暮れ

（『正治初度百首』・『拾遺萬草』・『万代集』・『統千載集』）

良経

萩原や末越す風のはにいでて下露よりもしのびかぬける

（『治承題百首』・『秋篠月清集』・『未木抄』）

通具

世の中になびき起きふす下萩も末越す風に露はおちけり

（『千五百番歌合』）

俊成卿女

消えかへり露ぞみだらる下萩の末越す風のとふにつけても

（『水無瀬殿恋十五首歌合』）

儀子内親王

秋きぬとたれかしまし下萩の末越す風の音にたまずば

（『新葉集』）

これらはみな、「末越す風」に「萩原や」ないしは「下萩の」という言葉の結びついた、『狭衣物語』歌固有の表現形式を踏んでおり、例に則していえば、定家・良経の作には(B)歌の、通具・俊成卿女の作には(A)歌の、そして儀子内親王の作には(A)・(B)両歌の影響をうかがれ想定してみてもよからう。(なお、「露」あるいは「消え」などの語が見えるものについては、(B)歌に並列された女二宮のもうひとつの歌「下萩の露消えわびし夜な夜なもとふべきものと待たれやはせし」(巻三・71頁ノ風・百)との関連も考慮されよう。)

以上のことから、中世和歌に用いられた「末越す風」という歌語そのものについてはともかく、少なくともこれに「下萩の」もしくは「萩原や」が連結した表現の上には、『狭衣物語』歌の投影があると結論される。

\*

なげきわび寝ぬ夜の空ににたるかな心づくしの有明の月

(巻四・20頁)

龜山山麓の某寺で瀕死の病床につく故式部卿宮の北の方を見舞った際、狭衣は、かねてより志のあったその娘に親しく接する機会を得た。そして彼は、折からの有明の月に照らして出された姫君の麗姿が、はからずも我が永遠の恋人源氏宮に生きうつしてあるのを見て、

うの胸中をかく詠じたのである。この歌ではまず、第二句中の「寝ぬ夜の空」という表現に着目してみたく、その先蹤は『実方集』のうちを求めることができる。

わやめ草寝ぬ夜の空の時鳥待つあけほのの声をきかばや

(『実方集』)

先にも述べたように(注ア)、『狭衣物語』作者が『実方集』を熟知していたことは確かであり、この場合、狭衣詠の「寝ぬ夜の空」は、右の歌から学びとられたものと考えた方がえなう。

ところで、この歌語の用例はその後においても少ないのであるが、そのうち次の寂蓮の歌などは、直接『実方集』の歌に依拠して詠まれたとおぼしい。

あしひきの山時鳥待つとも寝ぬ夜の空に明くる東雲

(「六百番歌合」・『寂蓮法師集』)

これに対して、俊成卿女の一首、

見るほどぞしばしなぐさむなげきつつ寝ぬ夜の空の有明の月

(「千五百番歌合」・『俊成卿女集』・『新統古今集』)

は、既に先学の指摘があるところ、『源氏物語』須磨巻の「見なほほどぞしばしなぐさむめぐりあはむ月の都ははるかかなれども」とあわせて、『狭衣物語』「なげきわび」の歌を本歌としているし、また知家の、

なげきわび寝ぬ夜の空の明けやらうかりし鳥の音こそ待たる

れ (『明題集』・『続後撰集』)

なども、はじめの十一文字が『狭衣物語』歌と全く一致しており、これを踏まえたものと見るべきであらう。

視点を「寝ぬ夜の空」に据えた場合の受容状況は、おおよそ以上のごとくであるが、この歌の与えた影響という点でなお付言するならば、『古今集』秋上の「木の間よりもりくる月の影見れば心づくし

の秋はきにけり」(よみ人しらす)を本歌とする。

業清

山の端をいづても松の木の間より心づくしの有明の月

(『新古今集』)

も、下句の表現が等しいことから、あるいは「狭衣物語」の歌をも念頭に置いた作といえるかも知れない。

## 二

次に、『狭衣物語』作者の創造したと考えられる歌語が中世和歌に受容されたケースについて、みづゆくことにしたい。

## \*

せく袖にもりて涙やゆめつらんこそ色ます秋の夕暮れ

(巻一・百頁ノ風・百)

右は、失踪した飛鳥井女君を思い悲嘆にくれる狭衣の独詠であるが、初句中の「せく袖」という表現は、どうやらこの物語のオリジナルらしい。そしてこの歌語は、中世和歌にかなりとりこまれていく。今、その中からいくつかを例示してみよう。

護岐

涙川たぎつ心の早き瀬をしがらみかけてせく袖がなまき

(「正治初度百首」・『二条院讀岐集』・『新古今集』)

定家

せく袖よ瀬々の埋れ木あらはれてまた越す波に朽ちやはたなん

(「院句題五十首」・『拾遺草』)

良経

せく袖に涙の色やあまららんがむるままの秋の上の露

(「水無瀬殿恋十五首歌合」・『秋保月清集』)

秀能

せく袖に涙はばなすもなぐナキよ色にならまてふる涙かな

(『如願法師集』)

甚良

せく袖の涙の色やくれなるのちしほの衣やめて朽ちらん

(「宝治百首」・『統拾遺集』)

行家

せく袖にもらばうき名もたらぬべし身をもおもはぬわが涙かな

(『統拾遺集』)

これらの詠作に見る「せく袖」は、直接にせよ間接にせよ、おそらく『狭衣物語』から出たものと思われるが、中でも二条院讃岐及び良経の歌については、さらに詳しく分析ができればよいのである。

まずは讃岐の歌から、『新古今集』諸注の指摘によれば、この一首は、『拾遺集』恋田の「涙川おつる水上早ければせきぞかねつる袖のしがらみ」(貫之)、『古今集』恋一の「あしひきの山下木の木がくれたぎづ心をせきぞかねつる」(よみ人しらす)、『源氏物語』手習巻の「身を投げし涙の川の早き瀬をしがらみかきつたれかとどめし」(浮舟)あたりを踏まえた頗る重層的な作となつてゐるわけだが、ここで考えつゝふたつことがふたつある。ひとつは「早き瀬」という言葉の問題で、これが直接には浮舟の詠に拠つたものであることは認めねばならぬにしても、一方で、『狭衣物語』との関係も無視できないように思われるのである。なぜなら、『狭衣物語』の件の歌とそれに並置された「夕暮れの露吹きむすぶ木枯らしや身にしむ秋の恋のつまなる」の二首を頂点とする極めて情趣深い一場は、「(飛鳥井女君ハ)いかに早き瀬にしづみはてん」と結ばれており、讃岐歌の「早き瀬」が、こゝと響き合つてゐるといふ見

方も成り立つはずであるし、この語がまもなく、巻一巻末の有名な飛鳥井女君の詠「早き瀬の底のもくづとなりきと扇の風よ吹きもつたへよ」へと結晶してゆく点も、看過できないと感じられるからである。もうひとつは、讃岐歌のもつ骨組みそのものの問題で、私見によれば、この点左の『狭衣物語』歌のそれに倣つたものと考えられる。

涙川流るる跡はそれながらしがらみとむる面影ぞなき

(巻二・卯頁ノ風・百)

これも、かつて自らが道成に下賜した扇「扇の風よ吹きもつたへよ」と詠まれたその扇である。には「キリと残る飛鳥井女君の涙の跡を見て、狭衣が書きつけた歌だ」という点で注目される。要するに、先の讃岐の歌には、飛鳥井女君色が濃厚に漂つていて、「せく袖」という表現のみならず、一首全体に『狭衣物語』の影響を感じてゐるのである。

次いで良経の歌に關していへば、上句で「やうらん」の語法が共通してゐることのほか、結句「萩の上の露」に『狭衣物語』とのつながりが見える。この「萩の上の露」は、『古今集』秋上の「鳴きわたる雁の涙やおちつらんものおもふ宿の萩の上の露」(よみ人しらす)から取られた表現であるが、実は、『狭衣物語』「せく袖に歌直前の和歌的情趣に満ちた散文部分にも、「雁さへ雪居はるかに鳴きわたつ、涙の露も、さかりすぎたる萩の上に、玉と置きわたりつ」といふ、明らかにこの『古今集』の歌に依拠してものされた一節が存在するのである。良経が自作の第五句を「萩の上の露」とした背景には、右の回路を想定してみねばならず、彼のこの一首は、ふたつの歌を含む『狭衣物語』の一場面全体に基づいた歌だと見てよいのではあるまいか。

\*

吹きはらふ四方の木枯らし心あらばうき名をかくすくまもあ  
せよ  
(巻二・37頁ノ風・百)

一夜の思いがけぬ袂衣の侵入によつてその子をも身をもり、女二宮  
は深い憂愁に沈む。やんな中で生まれた右の歌の第二句「四方の木  
枯らし」も、この物語より前には用例がない。一方、中世和歌に  
つては、

定家

よしならば四方の木枯らし吹きはらへ一葉くもらぬ月をだに見  
ん  
(「正治初度百首」・『拾遺草』)

俊成卿女

真木の屋のあられふる夜の夢よりもうき世をよませ四方の木枯  
らし  
(「為家家百首」・『俊成卿女集』)

永陽門院少将

しくれつる空は雪けにやへなりてはげしくかはる四方の木枯ら  
し  
(「玉葉集」)

のごときが見られる。このうち定家の歌は、第三句「吹きはらへ」  
も女二宮詠の初句「吹きはらふ」に拠ったものと思われ、『狭衣物  
語』の影響が確かめられようか。

なお、ついでに述べらるるは、現在確認しうる限りにおいて「吹  
きはらふ」ではじまる歌の最も早い例は、『袂衣物語』の作者八条  
斎院宣旨が天喜三年(1085)物語歌合に提出した『玉藻に遊ぶ権大納  
言』の作中歌、「吹きはらふ風にみだるうしら露もものおもふ袖に  
にたるけふかな」(『風葉集』秋下)のようであり、『夜の寢覚』  
女巻部に、「吹きはらふあらしにつれてあぢぢふに露のこらじと君  
につたへよ」(『拾遺百番歌合』・『無名草子』・『風葉集』雑二)

といふ歌がありはするものの、中世期にはいつてこの形式を踏む和  
歌が少なからず詠まれたことも、あるいは『袂衣物語』作者の功績  
としてよいのかも知れない。

\*

しらすりし葦のまよひのたづの音を雲の上にはやききわたるべき  
(巻二・37頁ノ百)

女二宮を思ふ情に耐えきれず、再び彼女のもとへ忍び入った袂衣  
は、やがてわが子の声を聞いたことに触発されて、この歌を詠んだ。  
そして、ここにおいて創造されたらしい「葦のまよひ」という歌語  
は、少ないながらも、次のような中世和歌に受け継がれることな  
った。

家隆

わかぬ浦や葦のまよひのたづの音は雲居の月もあはれしらなん  
(「最勝四天王院障子和歌」・『壬二集』)

家隆

たづの鳴く葦のまよひのつき波にいく夜かなしき月を見つらん  
(『壬二集』)

良経

忘れずよほのぼの人をみしま江のたづかかれなりし葦のまよひに  
(「六百番歌合」・『秋篠月清集』)

右三首中特に家隆の「わかぬ浦や」の詠は、『袂衣物語』歌と葦  
のまよひのたづの音「まづが全く同じであるほか、表現上、「雲の  
上」に対して「雲居」、「しらすりし」に対しては「しらなん」が  
うれがれ呼応していると考えられ、両首の密接な関係は疑えないと  
ころである。

\*

唐泊底のみくづと流れしを瀬々の岩波たづねてしがな

(卷二・卯頁ノ百)

右は、瀬戸内の海に消えた飛鳥井女君を自らの手で探し求めたいとねがう狭衣の独詠。この歌には伝本間の異同が多く、第四句にも「瀬々の岩間」という異文が存する。ところがおもしろいことに、この「瀬々の岩波」と「瀬々の岩間」とは、いずれもが先蹤をもたない歌詠であつて、しかも中世和歌に受容された点で共通しているのである。まず左には、「瀬々の岩波」の用例をいくつか挙げておこう。

雪深き山のなかゆく木船川さすがにのこる瀬々の岩波

(「壬二集」)

家隆

佐保川の瀬々の岩波ふみしだき氷にわぶる小夜千鳥かな

(「詠四十七首和歌」・『拾遺萬草貞外』)

定家

大井川瀬々の岩波音たつて井せきの水に風こほらなり

(「二夜百首」・『秋篠月清集』)

良経

春暮れて花やらららん吉野川瀬々の岩波風かほらなり

(「千五百番歌合」)

俊成卿女

一方、「瀬々の岩間」を用いた歌としては、

鮎のふす瀬々の岩間にるる鶯のみのも波よる賀茂の川風

(「夫木抄」)

寂蓮

わきかへり下にぞむせぶ名取川瀬々の岩間の水のしら波

(「洞院撰政家百首」・『俊成卿女集』)

俊成卿女

後鳥羽院

ちる花に瀬々の岩間やせかるらん桜にいづる春の山川

(「後鳥羽院御集」・『続拾遺集』)

等がある。以上のうら俊成卿女「わきかへり」の歌については、多少のコメントを付け加えておきたいと思う。その第一点は、彼女の歌の初めの二句が、「狭衣物詠」卷二の狭衣の詠、

わきかへり水の下にむせびつつさもわびす吉野川かな

(卯頁ノ風・百)

の上句を念頭に置いたものである可能性が認められること。第二点は、同じく結句の「水のしら波」という表現が、「狭衣物詠」「唐泊」歌のすぐあとに続く「かひなくとも、かの跡の白波をだに見るや」ともがな」という狭衣の心中思惟部分に現われた「跡のしら波」と、何らかの関連を有するのではないかと推測されることである。もしそうであるとすれば、「狭衣物詠」がこの歌に及ぼした影響は、単に「瀬々の岩間」という歌詠の単位にとどまらなかったと見ることもができる。

\*

このころは昔のさむしろう片敷きう若根の枕ふしよからまし

(卷四・卯頁ノ百)

気のすすまない一品宮との結婚は、狭衣の進世願望にますます拍車をかける結果となり、現世の不如意を嗟嘆する右のごとき歌を生んだ。ここで注意しておきたいのは、第二句「昔のさむしろう」と第四句「若根の枕」とであり、いずれもこの狭衣詠において初見の歌

語といえる。はじめに、「苔のさむしろ」を用いたこの後の和歌の  
うら、まなものを何首か列挙しよう。

けすはしもめきねが峰に雪つみて苔のさむしろ敷きかへつらん

俊頼  
良経  
（『散木奇歌集』）

岩が上の苔のさむしろ露けきにあらぬ衣を敷けろしら雲

俊成卿女  
（『南海漁父百首』・『秋篠月清集』）

あすきたに待ちつかり寝の露ながらいく夜へぬらん苔のさむし  
ろ

後送巖院  
（『洞院撰政治家百首』・『俊成卿女集』）

住吉とおもはん人のためなれや岸に敷くつふ苔のさむしろ

下野  
（『宝治百首』・『夫木抄』）

奥山の深山がくれの片敷きに露の宿かる苔のさむしろ

式子内親王  
（『宝治百首』・『明題集』）

ついで、「岩根の枕」に關しては、

苔むしろ岩根の枕なれやきつ心をあらふ山水の声

家隆  
（『前小斎院百首』・『式子内親王集』）

つげやらば妹やとがめんにひたし岩根の枕たれにかはすと

光俊  
（『洞院撰政治家百首』・『壬二集』）

忍山岩根の枕かはすとも下ゆく水のもらすもがな

良経  
（『日吉社撰歌合』・『新後撰集』）

などの作がある。なお伝本によつては、先の歌の第四句が「いはね  
の枕」ではなく「いはほの枕」となつてゐるものもあるが、こちら  
もここに見えるのが最初のものであり、その中世和歌における用例  
としては、左のごときが見出される。

秋山のいはほの枕たづねつもゆるさぬ雲を旅心地する

定家  
（『拾遺愚草貞外』）

奥山のいはほの枕苔むしろかくてもへなんあはれ世の中

家雅  
（『風雅集』）

\*

面影は身をぞはなれぬうらとけつ寝ぬ夜の夢は見るとなけれど

（卷四・20頁／風・百）

故式部卿宮の姫君が、己が至愛を捧げる源氏宮と瓜分たつてある  
ことを知つた狭衣は、帰邸してからもうその面影を忘れることができ  
ず、眠れぬままにこの歌を書き送る。初めの二句は、諸注の言うよ  
うに、『源氏物語』若紫巻の光源氏の歌「面影は身をもはなれず山  
桜心のかぎりとめつきしかど」から取られており、構想上の影響関  
係を裏打ちするものとして興味深い。それはともかく、ここでは  
『狭衣物語』作者の創造した歌語とおぼしい第四句中の「寝ぬ夜の  
夢」に、焦点を絞つてみたい。この表現をとりいれた中世和歌は少  
ないようだが、鎌倉期のものとしては、

軒ちかき花桶のにはひきつ寝ぬ夜の夢はむかしなりけり

寂蓮  
（『正治初度百首』・『寂蓮法師集』・『続古今集』）

良経

片敷きの袖の水もむすばはれとけつ寝ぬ夜の夢やみじかき

(「正治初度百首」・「秋篠月清集」)

平親清五女

なき明かす涙の水とけてだに寝ぬ夜の夢は見るとしもなし

(「平親清五女集」)

などがあり、また時代が下ったものまで含めると、たとえは、

実隆

わかれのみうつつと見えつひととせは寝ぬ夜の夢とわとの面影

(「再昌草」)

といった例が見えたる。以上のうち特に注目すべきは、平親清五女の歌で、その第三句「とけてだに」は狭衣詠の「うちとけて」に、第五句「見るとしもなし」は同じく「見るとなけれど」にそれぞれ依拠したものと断じてよく、さへには『狭衣物語』の影響が如実に窺えるのである。

\*

神垣は杉のこすゑにあらねども紅葉の色もしく見えけり

(巻四・28頁ノ風)

右は、平野行幸の折、今は斎院となつた源氏宮の居所近辺が美しい紅葉の錦に彩られてゐるのを眺めやつて、狭衣の詠んだ歌。これが、『古今集』雑下の「わが庵は三輪の山もと恋しくはとぶらひきませ杉立つる門」(よみ人しらす)を念頭に置いた作であることは、既に諸注の指摘するところだが、第二句中の「杉のこすゑ」という歌語は、その際『狭衣物語』作者の意匠により生まれ出たものと考えられる。中世期の和歌で、この語の見える作品はかなりあるが、以下には、その代表的なものを教首例示しておくことにする。

慈円

三輪の山杉のこすゑをこめつれば霞を春のしるしなりける

(「拾玉集」)

家隆

三輪の山杉のこすゑの五月雨に待ちみぬ人もなほ待たれけり

(「道家家百首」・「壬二集」)

良経

にどりつる道に今宵はふけにけり杉のこすゑに有明の月

(「六百番歌合」・「秋篠月清集」・「明題集」)

雅経

たづねくる人は昔せて三輪の山杉のこすゑの雪の下折れ

(「正治二度百首」・「明日香井集」・「新統古今集」)

俊成卿女

春はまづ杉のこすゑのうす緑霞をうむる逢坂の関

(「最勝四天王院障子和歌」)

見てわかるとおり、先の『古今集』歌を踏まえるものが多い。が、そのことと「杉のこすゑ」という言葉とが結びついている事実は、それらの詠作が狭衣の「神垣は」歌を経由して形成されたことを、物語っているように思われる。

\*

人しれぬ入江の沢にしる人もなくきする鶴の毛衣

(巻四・28頁 百)

わが子一品宮の産衣に書きつけられた飛鳥井女君の右遺詠に見る「入江の沢」もまた、この物語の案出した歌語であるようだ。さしつかへなく、この語は、

人しれぬ葦間に月の影とめて入江の沢に秋風ぞ吹く

定家

（「院句題五十首」・『拾遺草』・『夫木抄』）

行家

けふとも描む人あらずかくれ沼の入江の沢にもゆる若菜は

（「宝治百首」・『明題集』）

といった中世和歌に継承され、また、擬古物語『苔の衣』の作中歌にも、

ひたすらにかなしきものは鶴の子を入江の沢におきり列るる

がある。就中定家の作は、初句「人しれぬ」も全く一致しており、『狭衣物語』の歌を明らかに本歌としている。

### 三

ナラ最後に、以上の考察からも知られるとおり、『狭衣物語』を特に積極的に受容したと思われる三人の歌人―俊成卿女・良経・定家―の、これまで触れえなかったその他の被影響作品について、一瞥しておきたいと思ふ。

### \*

俊成卿女の本歌取り歌に関しては、既に森本元子氏の詳細な調査があるので、ここでは氏の御指摘に漏れたものを、私見によりいくつか拾い出すにとどめる。まず「宝治百首」首夏の一、

ぬきかへし花ぐめ衣うれならぬ苔の袖にも夏ぞしららる

は、『古今集』哀傷の「みな人は花の衣になりぬなり苔の袂よかわきだにせよ」（遍昭）を根底に置くと同時に、『狭衣物語』の左の二首にも依拠した歌。

身のしろうもわれぬききせんかへしつとちもひなわびや天の羽衣

（巻一・208頁ノ百）

紫の身のしろう衣うれならばをよめの袖にまさりこそせめ

（巻一・208頁）

ついで、「建保名所百首」のうら飛鳥川を題とする、

末遠く君をがたのむ飛鳥川あすは瀬瀨をしらぬみくづに

は、中ほどの表現を飛鳥井女君の歌、

わたらん木まさりなば飛鳥川あすは瀬瀨となりもこそすれ

（巻一・208頁ノ百）

にそのまま負っている上、全体に飛鳥井女君諱の心を詠んだ趣きが感じられる。また、

忍ぶるを音にたつよとやなやふらんいはせの森のうぐひすの声

（「建保名所百首」・『夫木抄』）

ことわりの春の暮れとはいひながらをしみもあへず花のららるん

（「院句題五十首」）

の二首は、うれされ次の作中歌を踏まえたもの。

忍ぶるを音にたつよとや今宵は秋のしらべの声のかぎり

（巻二・30頁ノ百）

ことわりの年の暮れとは見えながらつもりに消えぬ雪もありけり

（巻四・212頁ノ風）

はじめの一首は、第二句までを『狭衣物語』歌より借用して恋の歌を四季の歌へと変換し、二番目の作は、同じく上句を換骨奪胎して哀傷の歌を四季の歌へと置き換えた本歌取りとなっている。さらに、久保田淳氏の言われるように、

夢かよ見し面影もちぎりしも忘れずながらうつつならわは

（「影供歌合」・『新古今集』）

も、左の女二宮の歌に拠っている。

夢かよ見しにもにたるつらさかなうきはためしむあらずとち

もふに

（巻三・71頁ノ風ノ百）

\*

良経ではまず、建久五年（1194・良経26才）の作「南海漁父百首」  
志十五首のうち、確實なものとして次の三首が挙げられる。

鳩鳥のかくれもはつぬさざれ水みづ下にかよはん道みちだにもなし  
とふべしと待たぬものゆる萩の葉はぎに夜な夜な露のおき明かすか  
な

たづぬべき海山とだにたのまねはげに恋路こいぢ、そ別れなりけれ  
これらはおのおの、左に掲げる『狭衣物語』の歌に依拠した作品  
と認められよう。

水浅みかくれもはつぬ鳩鳥とびの下にかよひし底も見じかは  
（巻四・85頁）  
下萩の露消えわびし夜な夜なもとふべきものと待たれやはせし

おもひやる心ざいとどまよひぬる海山うみとだにしらぬ別れに  
（巻三・71頁／百）  
また、同百首萩の、

はるかなる常世はなれて鳴く雁の雲の衣ころもに秋風を吹く  
は、直接には『源氏物語』須磨巻の「心から常世をすてて鳴く雁を  
雲のようにもおもひけるかな」を本歌としながら、別に、「狭衣物  
語』巻三の狭衣の歌、

きかせばや常世はなれし雁がねのおもひのほかに恋ひて鳴く音  
を  
（75頁／百）

からも影響を受けていると思われる。  
続いて、「千五百番歌合」に見え『新古今集』にも採られた、

めぐりぬはんかぎりはいつとしらねども月なへだてやよよの浮  
雲

は、『狭衣物語』巻四で狭衣と源氏宮とがやりとりした二首、

めぐりぬはんかぎりになき別れかな空ゆく月のほつをしらぬ  
は  
（249頁／百）  
月だにもよよの群雲へだてずば夜な夜な袖に宿しても見ん  
（250頁／百）

をあわせたような歌となつてゐる。なお、はじめの狭衣詠が、「六  
百番歌合」別巻の、

忘れのちぎりをたのみ別れかな空ゆく月の末をかかえて  
にも踏まえられつゝゐることは、寺本直彦氏御指摘のとおり  
このほかでは、

音にたつてつげぬばかりやはたるこゝ秋はらかしと色に見せけ  
れ  
（『秋篠月清集』・『夫木抄』）  
うき舟のたよりもしらぬ浪路にも見し面影のたため日かなき、  
（『秋篠月清集』・『新勅撰集』）

の二首が、うれやれ、  
声にたつてなかなばかりやものおもふ身はうつせみにおとりやは  
する  
（巻一・28頁／風・百）

うき舟のたよりにゆかんわたつ海のう、ことをしへよ跡のしら波  
（巻二・30頁／風・百）

に拠つてゐるといえるだろう。（後者については、既に寺本氏の御  
指摘がある。）  
\*

定家が『狭衣物語』作中歌に依拠して詠んだと考えられる作品で、  
これまで言及し残したもののうち、先学によって明らかにされてい  
るところから掲げると、

あまましや浅間の嶽に立つ煙たえぬおもひをしる人もなし

(『拾遺萬草員外』)

鳴きわたる夜寒むの風のいかならん帝世はなれし雁のつばさに

(『拾遺萬草』)

なびかじな海人の藻塩火たきよめて煙は空にくよりわぶとも

(『六百番歌合』・『拾遺萬草』・『新古今集』)

の三首がある。はじめの歌に関しては、石田吉貞氏が

あさましや浅間の山の煙には立ちならぶべきおもひとも見す

(巻四・88頁)

を本歌として指摘され、残りの二首については、久保田淳氏が、

きかせはや帝世はなれし雁がねのおもひのほかに恋ひて鳴く音

を (巻三・101頁/101)

を、うれがれ本歌、参考歌として挙げておられる。今のところ、こ

(巻三・107頁)

れ以外に付け加えるべき例も持たないが、ひとつだけ触れておくと、

わたつ海の底の玉藻に宿かりて南の空を照らす月影

(『拾遺萬草』・『続古今集』)

の初二句は、巻二の狭衣の歌、

あやりする海人ともがなやわたつ海の底の玉藻もかづき見るべ

く (107頁)

から取られた表現といえるかも知れない。

おわりに

これでひととおりの考察を終えるが、作中歌の単純な表現のレウ

エルに視点を据えて見るだけでも、『狭衣物語』の影響を受けた和

歌はまだいろいろと探し出せるはずで、ここに報告したのは、無

論者の一斑にすぎない。また、調査の対象を物語の散文部分にまで

広げ、所謂心を詠んだ歌や面影のある歌まで含めて拾った場合には

さらに多きにのぼることはいうまでもないだろう。したがって、『狭

衣物語』と中世和歌との関係を大局的に見通して総括しようとする

は、いっとうの精査をかさねて他日を期すしかないが、ここで一応

の傾向をまとめおくと、

(1) 当然の結果ではあるが、『狭衣物語』作中歌の影響を受けた歌は、

新古今時代を迎えて急激に増えつゝ、特に、定家・良経・俊成

卿女ら御子左家流歌人の作に多い。

(2) 一首一首の与えた影響の度合に差異もあり、もとより統計的に証

左を示すことは困難だが、『狭衣物語』全篇中では、飛鳥井女君

譚に関わる歌の影響が、ことに強いように思われる。

(3) 影響を残している作中歌は、『百番歌合』もしくは『風葉集』に

撰はれている場合が多い。

以上、甚だ粗雑な論述と相なり、見落としや行きすぎもあろうか

と憂ふ。大方の御叱正をこう次第である。

注

①『源氏物語受容史論考正編』(S45年・風間書房)及び『源氏物

語受容史論考続編』(S59年・風間書房)。以下ではうれがれ、

『正編』・『続編』と略称する。

②中世和歌研究の方面では、特に久保田淳氏が細心の注意を払って

おられる。また、『狭衣物語』サイドでは、日本古典全書(松村

博司・石川徹校注)が早くにこの問題を提起し(解説)、補注の

ところどころに言及がある。

③『狭衣物語』の本文は、とりあえず日本古典全書本に拠って掲出するが、異同のある場合には必要に応じて触れることとする。また、和歌の他諸資料の引用は、『新編国歌大観』（第一巻～第三巻）・『私家集大成』等に適宜依拠する。

④「人ぞなき。」には、「人はなし」（深川本）・「人もなし」（内閣本・百番歌合ほか）・「人のなき」（押小路本ほか）といった小異が見られる。

⑤「風」は、当該の歌が『風葉集』に、「百」は、同じく『百番歌合』に、それぞれ採入されていることを示す。

⑥久保田淳著『新古今和歌集全評釈』（第七巻・112頁）、近藤潤一ほか著『初学百首』（S53年・桜楓社 108頁）に指摘がある。

⑦『狭衣物語』作者が、『円融院御集』、『実方集』のうらひずれの資料によつて、この歌を学んだのか、確かなところは不明であるが、『狭衣物語』には、『実方集』所収歌に拠つた表現がしばしば認められるため、おそらくこれも同集が直接のソースとなつていよう。

⑧「いはぬ色」をおもひけらしな山吹の君かへりてのけしの露けし、  
（書陵部蔵三十六人集本『中務集』）

なお、『続十載集』雑上に次のことき例がある。

山吹の花も心のあれば、こゝろいはぬ色には咲きはじめけめ

この歌の作者は、正保四年版『二十一代集』所収本では、在原業平となつており、『勅撰作者部類』等の資料によつてもこのこととは証されるかに見える。もしこれが業平の歌であるとすれば、『狭衣物語』以前の例として追加されねばならないが、『新編国歌大観』（書陵部蔵吉田兼右筆）本によると、作者名は、業平ではなく、藤原業平とあつて問題が残る。（業平は、藤原南家流清尹男、従四位下刑部大輔、本名懐能。（『尊卑分脈』）『新後

撰集』恋二、『続十載集』哀傷に各一首の入集を見る勅撰歌人。（『勅撰作者部類』）断定はできないけれども、私見では、右の歌の作者は業平と見なすのが正しいように思われる。その理由の第一は、「尹」と「平」との字体相似（もしくは「と」と「た」と「こ」と）（「ひら」との仮名連綿体の類似）から、誤写が行なわれた可能性がきわめて高く、この場合知名度の圧倒的な差を考慮すれば、まず間違ひなく「業平」→「業平」と誤られたはずであること。第二は、右の歌のものが、業平作というにはかなり時代の下つた趣きを感じさせて疑わしいこと。第三は、右の歌が、『狭衣物語』冒頭部の「（山吹ノ花ノ）くらなししも咲きうめけん契りこころちをしけれ。心のうらひかにくるしかるらん」（108頁）という狭衣の言葉と「いかにせん」の歌を踏まえて作られたのではないかと考えられること。よつてこの『続十載集』所収歌は、先例と認めないことにしたい。

⑨頭昭云、「此比和歌の判は、俊成卿・清輔朝臣、左右なき事也。しかるを、共に偏頗ある判者なるにとりて、其様のvariなる也。（中略）清輔朝臣は、外相はいみじう清廉なるやうにて、偏頗と云ふ事露も気色に現さず、自ら人の傾く事などあれば、気色をあまりつあらがひ論ぜられしかば、人皆その由を心得て、更にいひ出る事もなかりけり」

⑩日本古典文学大系『歌合集』中世篇解説（谷山茂氏執筆）に、「恋十番判詞に『こはたれが詠みたるにか待らむ』などということばが見えるので、おそらく作者隠名であつたと思われる」とあり、ううしたのは、「歌うのものに対する判者の忌憚のない自由な批評を求めたためであつたらう」とする。（204頁）

⑪俊成は、教長・清輔が『拾遺古今抄』（散逸）撰集の際、大江千里の歌「照りもせずもりもはつぬ春の夜の朧月夜にくもものぞ

なき」を、これが『源氏物語』花宴巻に引かれてゐる歌であり、「不明不暗朧々月」という白詩句の翻案であるにもかかわらず、夏の部に入れてしまつたことに對し、「教長も清輔も源氏を見候はず、まして文集と申文をも見候はず」と批難してゐる（『正治奏状』）。このことについて谷山茂氏は、「六条家の人びとに對する俊成の反撃的態度の激烈だつた時代の文章でもめる」ゆゑに彼の「熱し過ぎた失言である」とされ、「清輔ほどの碩学が『源氏』や『文集』に眼を通さなかつた」ということはあり得ない、事實眼を通してゐる。ただ『アフリもせず曇りもはず』の歌の原拠に思いよらなかつたのは千慮の一夫に過ぎない」と述べておられる。（「歌合における六条家の人びと」・著作集第四卷『新古今時代の歌壇と歌合』第二章48頁）

⑫谷山茂氏は、清輔の判詞について「口なし色（山吹色）を『言はぬ色』と詠んだ例も稀ではない」（傍点筆者）とされ、反証として円融院御製と注8で触れた『統十載集』・業平・歌とを提示しておられるが（日本古典文学大系『歌合集』別々宛頁頭注13）、いがかが。なお同様の反論は、夙に小沢芦庵の同歌合判谷図書館本註記にも見られる（萩谷朴著『平安朝歌合大成』207頁）。

### ⑬『八代集抄』

⑭定家の歌が『狭衣物語』歌を踏まえてゐることは、赤羽淑氏によつて指摘済み。（「定家の習学期の歌」一別雷社歌合・初学百首・堀河題百首）ノートルダム清心女子大学国文科紀要第3号（S44・3）また、近藤潤一ほか著『初学百首』には、この定家の歌に関する詳しい報告と討議がある。（167～171頁）

⑮『新古今集』のほか『百人一首』等にも採られたこの名歌の第三句「かぢをたえ」については、三字目の「を」を、(1)格助詞と解する説、(2)「緒」と解する説の両方が行われてゐるが、こと『狭

衣物語』の歌に關していえば、(2)説に従うのがよいだらう。なぜなら、『狭衣物語』歌の初句と第二句との間には、「楫を舟にとりつないておく緒、すなわち楫緒が絶える（ように）」「↓」「魂をつらぬきとめておく緒、すなわち玉の緒（＝命）も絶える」という意味的連係の妙を読みとれるように思えるからだ。

⑯寺本『正編』前編第一章第七節「新古今時代歌壇と源氏物語」24頁に指摘がある。なお、同氏『統編』第一部第六章「鎌倉初期歌壇における源氏物語受容」第二節46頁には、やはりこの歌に拠つた平親清四女の詠が紹介されてゐる。

⑰俊成卿女の歌については、森本元子著『俊成卿女の研究』（S51年・桜楓社）第六章「俊成卿女と源通具の作」127頁及び第九章「俊成卿女の本歌取作」287頁に指摘がある。また、筆者がこの次に例示する「六百番歌合」の二首に關しても、既に氏が言及されてゐる。（上記127頁）なお同者は以下において『研究』と略称する。

⑱日本古典全書『狭衣物語』上巻277頁頭注4ほか。

⑲この定家の作は、「うき身世に」の歌以外に、やはり花宴巻に見える朧月夜尚侍の口ずさんだ一節「朧月夜ににるものぢなき」や光源氏の歌「せにしらぬ心地、ぞすれ有明の月のゆくへを空にまかへて」あたりも踏まえてゐる。

⑳後鳥羽院御製についてひとこと添えておくと、この歌には朧月夜の「うき身世に」歌を媒介として、これに答えた光源氏の詠「いづれがと露のやどり」をわかんまに小世が原に風もこ吹け」と、『狭衣物語』「たづねべき」の歌とを結びあわせた趣向が窺える。㉑二番目の歌に關しては、既に久保田淳氏の御指摘がある。（『新古今歌人の研究』第三篇第二章88頁。同著は以下『研究』と略称する。）

㉒『正編』25・287頁など。

②この歌の影響については、先学諸氏のたびかさなる御発言がある  
ので参照いただきたい。荻村丈人「藤原俊成の芸術論」(国語と  
国文学ノS37・4)、寺本「正編」前編第一章第二節「俊成の源  
氏物語受容」・第六節「俊成卿女と源氏物語」・第七節「新古  
今時代歌壇と源氏物語」、久保田「研究」第二篇「藤原俊成の研  
究」第三章、森本「研究」第九章「俊成卿女の本歌取作」・第十  
章「俊成卿女の本歌取について」ほか。

③建仁二年(四二)「水無瀬殿恋十五首歌合」時に詠進された俊成卿  
女「消えかへり」の歌に対し、判者俊成は早く「右歌、末越す風  
はとふにつけてもといへる、またよろしくは侍るべし、これは狭  
衣と申す物語の歌の心に侍るべし」と言及しており、その後同歌  
合から撰歌されこの歌も番えられた「若宮撰歌合」(後鳥羽院判  
・「水無瀬校宮十五番歌合」(俊成判)の判詞においても同様の  
指摘がなされている。また俊成卿女には、これらの「狭衣物語」  
歌に依拠した詠作がほかに二首ほどある。  
秋きぬと末越す風に下荻の露消えかへりむすばほれつつ  
(「北山三十首」・「俊成卿女集」)

荻原や露越す風にすむ月に身にしむ秋の色を見えける

(「建暦三年七月十三日内裏歌合」)

なお、ここで扱った「狭衣物語」の三首が俊成卿女の作品に与え  
た影響に関しては、寺本「正編」前編第一章第六節、森本「研究」  
第六・九・十三章等に先だつ言及がある。このほか定家の「いっ  
かへり」歌が「狭衣物語」(B)歌に拠った作であることも、系賀き  
み江氏によつて指摘済み。(「新古今の女歌人」ノ和歌文学会夏  
季講座ノS47・7)

④日本古典文学大系『平安鎌倉私家集』所収「俊成卿女家集」(久  
松潜一校注)57頁、森本「研究」第九・十章。

⑤以上のほか、寺本「正編」前編第一章第六節57頁参照。  
⑥寺本氏の御指摘によると、実材母にも「こすまにはうたてのこら  
ぬもみち葉を庭まてはらふ四方の木枯らし」といった被影響歌が  
ある。(「続編」第一部第六章第二節57頁)

⑦平安時代末期には既にさまざま「狭衣物語」の本文が流布して  
いたようではあるが、「右波」と「岩間」との異同が中世以降  
に生じた可能性もなわけではない。ただこの場合、「百番歌合」  
(定家編、元久三年(四〇)三月以前成立か)には「いはなみ」、  
現存最古の「狭衣物語」の伝本深川本(鎌倉初期写、吉田幸一著  
「深川本狭衣とろの研究」S57・古典文庫参照)には「いはまむ」とあり、新古今時代の歌人たちが享受した本文には(うのいずれ  
が原型であるかは別として)、既に両様が存在したと考えておい  
つていただろう。

⑧この歌に拠った実材母の詠「山川の水の下をゆく水の音さへとら  
つむせぶころかな」が、寺本氏により紹介されている。(注27に  
同じ)

⑨ただしより直接には、

石間ゆく水のしら波たらかへりかくころは見わかすもめるか

(「古今集」・「古今六帖」)

消えはつぬ雪かたを見る谷川の岩間をわける水のしら波

(「赤染衛門集」)

あたりを考ふるべきであらうか。またこの歌の第三・第四句のつ  
なかりには、

名取川瀬々の埋れ木あらはればいかにせんとかわひ見やわけん

(「古今集」・「古今六帖」)

が効いている。

⑩筆者が現在手元で確認できるものについていえば、「いはね」と

ただいた諸研究書を御覧ねがいたい。

—九州大学大学院修士課程—

あるのは、古活字本（全書本の底本）のほかは大島本（南北朝期写）・承応版本。「いはほ」とあるのは、『百番歌合』をはじめとして蓮空本（甘露寺親長筆）・内閣本（近世初期写）・鎌倉本（元和頃写）・宝玲本（近世初期写）。

又平親清五女の物語取り歌については、寺本『続編』第一部第六章461-463頁参照。

27 『研究』第九章「俊成卿女の本歌取作」。

28 『新古今和歌集全評釈』（第六卷・20頁）。ほかに氏は、『新古今集』恋二巻頭に配された、

下もえにおもひ消えなん煙だに跡なき雲のはつがかなしき、

（「院句題五十首」）

も、巻四の袂衣の歌、

霞めよなおもひ消えなん煙にもたらおくれはくゆらぐらまし

（287頁ノ百）

を念頭に置いた作とされる。（同書第五卷・206頁）なお、『袂衣物語』作中歌に基づいた俊成卿女の右以外の作品については、寺本『正編』前編第一章第六節「俊成卿女と源氏物語」を参照されたい。

29 寺本『正編』前編第一章第七節204頁。

30 『藤原定家の研究』（S32・文雅堂）第二編第二章287頁。

31 『註藤原定家全歌集』上巻（S60・河出書房新社）494・131頁ほか。

32 先学諸氏がこれまでに指摘され説かれて来たところで、本稿において触れ残した部分（主なものは、「流れても逢ふ瀬ありやと身をなけて虫明の瀬戸に待ちこころみん」（巻一・277頁ノ百）歌の多大な影響、俊成の『袂衣物語』受容歌等）も勿論少なくない。それらについては、注で再三にわたって書名を掲げさせてい